

専修大学緑鳳学会

北海道短大で初開催

森山軍治郎教授が記念講演

専修大学緑鳳学会(矢邊學會長)の第15回記念大会が11月4日、初めて専修大学北海道短期大学で、会員ら41人が出席して行われた。

記念講演として、同短大商経社会総合学科の森山軍治郎教授が「北海道の民衆文化」をテーマに講演＝写真。続いて、金成洙同助教授、本学大学院経済学研究科博士後期課程の施錦芳さん、同文学研究科博士後期課程の市橋一郎さん、同経営学研究科博士後期課程の中嶋嘉孝さんの4人が研究の成果を発表した。



引き続き、総会と懇親会を開催。会務・監査報告のほか、活発な意見交換が行われた。

ライフセービング全日本で、本多さん、中曽根さん優勝

サーフライフセービング愛好会メンバーが全日本、全日本学生で大活躍一。

10月に開催された第32回全日本ライフセービング選手権で、中曽根麻世さん(平17経営=写真上)が女子アイアンウーマンで優勝、ボードレースでも準優勝を果たした。アイアンウーマンは昨年に続く連覇。また男子ビーチスプリントでは、本多辰也さん(平12商=写真下)が安定感のあるレース運びで優勝した。両選手とも海外の大会においても活躍する日本を代表するライフセーバーである。

さらに今大会で現役学生の中山信太さん(法2)も2キロビーチランで4位に入る健闘をみせた。また第21回全日本学生ライフセービング選手権大会では、男子ボードリレーでこれまでの最高の準優勝(上之園友輔さん、勝部興さん、三浦洋輔さん=いずれも経済4)となった。



写真は(C)日本ライフセービング協会提供

秋の褒章

◇瑞宝双光章

阿部 賢一氏 (あべ・けんいち=昭32法)

◇瑞宝単光章

大石 毅氏 (おおいし・たけし=昭50商)

《校友の本 紹介》

母に捧げる詩集

国見修二さんの「雪螢」

国見修二のペンネームで詩や小説を発表している平井修二さん(昭53文)が詩集『雪螢』をこのほど上梓した。雪への慈悲をおおらかに謳い上げ、雪国の風物や日常生活、家族への思いを伝えている。

「やがて／背負子いっぱいになった雪螢は／母を想ったのか／そのまま満ちて目を閉じる／母は青白い顔で振り向き／雪螢をみつめて微笑む」(「背負子(しよいこ)」から)

後書きで「気がついたら、詩集全篇に母が登場している」と記しているように、「母に捧げる詩集」となった。序文は詩人の松永伍一氏。

新潟県西蒲原郡潟東村(現新潟市)の出身。現在は同県妙高小学校の教頭を務める。(よっちゃん書房・頒布価格1000円)



第22回校友会グリーンカップゴルフ大会

校友ら89人が熱戦

10月27日、校友会恒例のグリーンカップゴルフ大会が東京よみうりカントリークラブで行われた。北海道、山口、広島など遠方からや70歳以上の方など、89人が参加、校友の深い絆を示す大会となった。

伊藤良雄大会実行委員長(校友会副会長)のあいさつ、蒲田重勝競技委員長(同体育振興部長)の競技説明を受け、プレー開始。熱戦を繰り広げた。

甘竹校友会長のあいさつ、桃野直樹校友会副会長の乾杯の発声で、懇親会を開会。個人優勝の篠原満也氏(昭38商経)、シニアの部優勝の西浦勝己氏(昭28商経)、ベストグロス賞の西村好登氏(校友同伴者)、団体の部で連覇した卓球部緑生会を表彰した。

なお、チャリティー協賛金8万7000円は日本ユニセフ協会に寄付された。



《専大校友を訪ねて》

日本映画の全盛期支えた名画座を活写

『銀座並木座』を著したフリーライター 嵩元友子さん(平3文)

「今よりずっと貧しかったのに、人々は生き生きといい顔をしていた。あの時代がいとおしく、無性に懐かしい」。小津安二郎、成瀬巳喜男、黒澤明らの名匠が活躍した昭和20～30年代の日本映画のとりこになった。43年生まれの自身が知らない「あの時代」の空気を求め、通い詰めたのは80席ほどの小さな名画座。8年前に惜しまれつつ幕を閉じたこの老舗映画館にまつわる物語を一冊の本にまとめ上げた。『銀座並木座 日本映画とともに歩んだ四十五年』(鳥影社)は、スクリーンを通し、数々の人生を教えてくれた“学校”への感謝の証しである。

成瀬の『浮雲』は2度見た。20代前半ではさほど心に響かなかったヒロインの壮絶な生き様が、30代近くになって輝きと共に伝わってきた。進路に悩んだ時期に見た黒澤の『椿三十郎』からは、器量を備えることの難しさを教えられた。

「いい映画には何気ないセリフや情景を、人に刻み付ける力がある」

こんな数々の名画を上映し続けた「銀座並木座」にも同様のドラマがあるに違いない。好奇心が原動力となった。同館の年代史を作り、「あなたの世代の人がなぜ興味を」といぶかる歴代の支配人にインタビューし、モギリの女性にも話を聞いた。

「小林桂樹ら賛同する映画人や作家が出費して誕生した」「初期のプログラムには、池部良や高峰秀子が絵や文章を寄せた」……そんな逸話から当時の名画座の存在の大きさを実感した。

取材後亡くなった元支配人夫人からプログラム原稿などの資料を託され、来年、展覧会を開く。「広がった人脈や知識は、宝物になりました」。

本学文学部人文学科では西洋古代史のゼミに属し、イスラエルを旅したことが思い出だ。卒業後は出版社勤務を経てフリーライターに。自らを「愚直で不器用」と称する。「カッコ悪いほど一生懸命生きていた」あの時代の日本人と、自身を重ね合わせている。

